

## 平成29年度事業報告

平成29年度は、独自事業5件を計画したが、実施は2件にとどまった。委託事業は29年度も、1件もなかった。

### 1. 研究報告書

「和歌山県をめざす若者たち～『田園回帰』が語る希望・家族・地域～」の発行

平成27年度から2か年かけて取り組んできた紀南地域におけるUIJターンの調査にもとづき研究報告書をまとめ、29年7月に発行した。報告書は、5章93ページで紀南地方への移住者を中心に移住の目的や暮らしのかたちをドキュメントタッチでまとめた「28の移住ストーリー」（第2章）を軸に、「人口減少社会・和歌山県と『田園回帰』」（1章）、「インタビューから見える『田園回帰』」（3章）「新しい住人たちを迎えて地元はどう受け止めているか」（4章）『田園回帰』の行方～移住政策の可能性と課題」（5章）に構成した。発行部数200部。中和印刷。

報告書を贈呈した元教員やジャーナリストからは、「いま若者の間でいま起きている変化が和歌山県でも起きていることを改めて知って興味深い」「地方の将来への希望について考えさせられた」などの感想が寄せられた。

### 2. 世界遺産追加登録・西行生誕900年記念事業「西行IN熊野・新たな熊野の歩き方」

紀州人西行が生まれて平成30年で生誕900年を迎えるのと紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産に追加登録（29年10月）を記念して企画した「西行×熊野」プロジェクト。

事業内容は、(i)「西行生誕900年。いま西行と熊野を語る」シンポジウムの開催。(ii) マップ「西行の和歌で訪ねる熊野の新しい歩き方」の作成（イラストは和歌山市のアニメ作家森恵さんに依頼。デザイン会社は検討）。(iii) 八上王子神社での献茶・茶会開催の3つ。29年度末から30年度初頭前後の実施を目指し作業をしたが、マップ「西行で訪ねる熊野の新しい歩き方」に関連し、ゆかりの地の写真撮影と西行の歌の分析にとどまった。また上富田町や茶人の意向についてヒアリングを行った。

### 3. きのくに研究

「廃校舎はいま～学校の活用と地域コミュニティ」

紀南地方を中心に和歌山県内で行なってきた廃校舎の調査研究で、当初提案の「廃校舎活用モデルの研究―廃校舎活用と地域コミュニティ」を、「きのくに研究」として、題目は標記のように改題して作成する。本事業は、地域における学校の存在と役割の重要性を

考えるとともに、廃校舎をあらたな拠点に地域コミュニティの再生につなげる動きを捉えることを主目的とする。廃校舎の活用モデル集的な要素を持たせる。発行部数200部、29年9月発行を目標にしたが、手付かずに終わった。

#### 4. 「紀伊半島のさんま食文化研究会」設立

ふるさとの食文化は、近年「地域資源」「観光資源」として活用する観点から注目されており、民間、行政さまざまな取り組みが行われている。しかし、一方で食の均等化が進み本来なかった名物が出現し地域性を見えなくする現象がみられるほか、海では水産資源の減少などによって食卓と食の文化を脅かしている。熊野地域の名物さんまずしやなれずしも同様である。地域の食を総合的、戦略的に考える「食文化研究会」のような組織がいま求められている。

本事業は、伝承女性、料理人、料理研究家、漁師、米穀店主などに呼びかけて、地域にネットワーク組織を立ち上げ、伝統文化であるすしをとおして紀伊半島南部のさんまと食文化について研究を進め、すしの付加価値を検討し情報を発信することをめざす。29年度は、個別の意見交換で世話人会の発足に至らなかった。

#### 5. きのくに活性化センター開設15周年冊子の作成について

きのくに活性化センターは、平成29年4月で開設15周年を迎えた。そこで、10年後の活動を記録として残すために、15周年記念事業として記念誌「きのくに活性化センターの歩み15周年」（仮題）を発行する。

この事業に関連しては、「紀南地域住民のふるさと観」アンケート調査を実施し、15年前のセンター発足時の意識の変化を分析するとともに、ふるさと紀南を語るシンポジウムを開催する。

#### 6. 広報紙「NEWS きのくに」Vol. 24号の発行

6ページ。2300部

未発行